あすかでらせいほういせき

飛鳥寺西方遺跡

はじめに

飛鳥寺西方遺跡は、飛鳥寺旧境内の西側に広がる遺跡です。この調査は、飛鳥寺西方遺跡の規模や構造を明らかにすることを目的とした範囲確認調査です。今回の調査地は、飛鳥寺西門跡から西に100mの位置にあたり、平成25年度に行われた調査区の北側に隣接し、一部重複して発掘調査区を設けました。調査面積は327㎡になります。

飛鳥時代、飛鳥寺西方地域は、歴史的な出来事の舞台としてたびたび登場します。『日本書紀』によると、斉明天皇の時代には、'飛鳥寺西' に須弥山の像を置いたと記されており、壬申の乱（672年）では飛鳥寺西の槻樹の下で軍営が置かれていたとも記されています。また、天武・持統天皇の時代には、蝦夷や隼人、多禰嶋人や都貨羅人などの飛鳥から遠く離れた地域に住む人々を槻樹の下に招いて饗宴をおこなったとも記されます。一説では、大化の改新（645年）前には、中大兄皇子と中臣鎌足が蹴鞠を通して出会ったのもこの飛鳥寺西方にある槻樹の下と言われています。このように飛鳥寺西方には、大勢の人が集まり、シンボルとなる槻樹がそびえていた"槻樹の広場"が広がっていたと考えられています。

主な検出遺構と出土遺物

今回の調査では、飛鳥時代の建物跡2棟と砂利敷を検出しました。

2棟の建物跡は、東西に軒をそろえて並んでいます。建物規模は2棟とも同規模で、柱間は南北2間、東西7間です。建物の柱穴は橙色を呈しており、埋土には焼土が混入されています。柱穴の平面形態は不整形なものが多く、大きさが33～116㎝、深さが約30㎝を測ります。柱間寸法は2.4～2.7mの間隔で不揃いに並びます。柱埋土には人頭大の石が埋められているものもありますが、柱を抜き取った後に落とし込まれたと考えられます。

砂利敷は約3㎝大の小石を敷き詰めたものです。各調査区で認確しました。この砂利敷は柱穴の上に覆っているため、砂利敷の方が柱穴より後に施されたことがわかります。

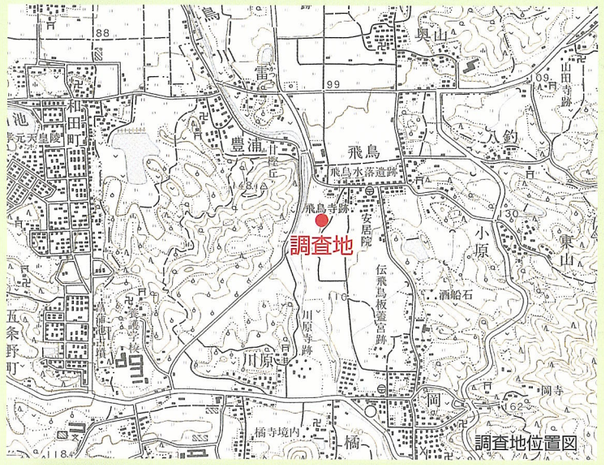
調査区からは土師器や須恵器、瓦、玉製品、獣歯、鉄滓、鞴羽口が出土しました。年代を特定できる出土遺物が少ないため、遺構の詳細な時期を絞ることが難しいですが、層位的にみてこれらの遺構は飛鳥時代に造られたものと考えられます。

まとめ

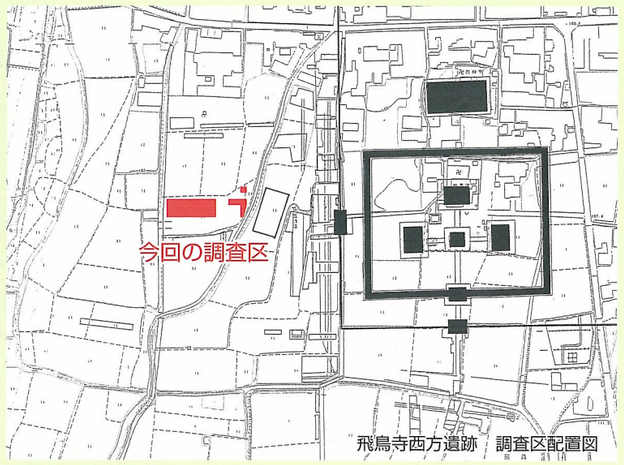
調査の結果、飛鳥寺西方遺跡ではじめての建物跡と砂利敷を確認することができました。建物の柱穴は規模が大小さまざま、柱間も不揃いであることから、同時代の掘立柱建物とくらべるとこの建物はやや雑な造りの印象を受けます。このことから、この2棟の建物は長期間建っていた建物ではなく、一時的につくられた仮設の建物跡と考えられます。建物の性格については、辺境の人々を招いた饗宴施設や壬申の乱に伴う仮設の建物であった可能性があります。今回の調査は飛鳥寺西方地域の土地利用を考える上で重要な成果であり、周辺部の調査によって遺跡の全容解明が期待されます。

飛鳥寺西方遺跡

2015年2月
明日香村教育委員会



調査地位置図



飛鳥寺西方遺跡　調査区配置図

調査区全景（西から）

調査区全景（東から）

調査区全景（上が北）※合成写真